時は、長府毛利藩の時代。藩内でも最も高い山奥の谷間に、「杢路子（むくろうじ）」という小さな里があった。「山と山とに物干しざおをたなげて物を干すげな」と世間で言われたほどの、山奥の里。

そんな杢路子の村庄屋が、正月挨拶のため息子を連れ、長府の町に向けて出かけたときのこと。深く険しい山道を抜け、高い峠（貴飯峠（きばとうげ））を越えたところで、視界がさあっと開けた。眼下に広がる盆地の風景をはじめて見た庄屋の息子は、驚きの声をあげた。

「父上、日本ちゅうても広いもんですのう。こねえな広いところもあるかいのう」

「ばかたれえ。ものを知らんにもほどがある。日本ちゅうのはのう、この十倍くらいもある。よう覚えちょけよ」

そう答える父に、息子は精一杯の知恵を働かせ、こう答えた。

「そんなら父上、ここは、小日本（こにっぽん）でがんすなあ」

いつしかこの話が広く伝わり、息子が感動した広い菊川盆地のことを人々は「小日本」と呼ぶようになったという。（＊）

民話の道をたどれば

この民話は「杢路子噺」とも「小日本」とも呼ばれ、山口県下関市菊川町を中心に語り継がれている。現在も菊川町にある農産物直売所は「小日本ふるさと市」と名付けられ、小さな橋にも「小日本橋」と付くなど、「小日本」は地域で親しまれている愛称だ。

庄屋親子が通ったとされる峠を探した。狭い山里に暮らす少年がはじめて見た、開けた土地に対する感動を追体験するためだ。地名はすべて、物語のまま現存する。まずは、菊川盆地の北側にある庄屋親子の里、杢路子（下関市豊田町）へ向かった。

杢路子は、標高六一六mの狗留孫山（くるそんざん）の麓に位置する。美しい棚田があると聞く杢路子奥野地区に立ち寄った。沢沿いのぽっかりと開けた場所がうまく生かされてある。朱い石州瓦の民家が数軒、石積みの棚田とともにひっそりと佇んでいた。すでに耕作されていない田んぼもあった。しかしながら石垣は崩れておらず、田んぼに出て働く人の姿も見える。

ここは、五世帯で四haを耕しているという。二〇一三年には「第二回下関市景観賞」を「奥野の棚田」管理組合が受賞し、平成の世においても、杢路子の風景の一片を守り、見せてくれる場所である。

杢路子地区から「小日本」の菊川盆地は、直線距離にすれば数kmほどの場所だが、菊川盆地を目指すには、貴飯峠を抜け山越えが必要だ。車一台がようやく通れる狭い山道は容赦なくくねり続ける。

貴飯峠の尾根は、山陰と山陽の分水嶺である。西へ流れる水は数kmほどで日本海へ、東に流れる水は瀬戸内海へ向かう。まさに、急峻で、馬の背のような日本の地形そのものがここにある。

峠道には、どこにも視界の開けた場所はなく、気がつくと山道を下りきっていた。もう一度、通ってみたものの、庄屋親子が一服しながら眺望を味わったような場所は見つけられなかった。

杢路子「奥野の棚田」。ここは旧豊田町が田園空間ミュージアムの一つとして取り上げてきたところ

忘れられた大地の物語を求めて

下関市菊川町「小日本」（菊川盆地）

民話が生んだ愛称「小日本（こにっぽん）」（菊川盆地）

（山口県下関市菊川町）

ライター　石井　里津子

現在、庄屋の息子が「小日本」と言い得た菊川盆地は、小日本平野とも呼ばれ、米どころとして知られている。山口県下でも最も早い時期に耕地整理が施されてきた。明治三十四（一九〇一）年に排水と田区改正を行った地区もあるというが、公式資料には明治三十五年の大規模な事業が記録されている。昭和四十五年発行の『菊川町史』に残る古老の話では、明治の頃すでに「耕地整理にあわせて、農地の中に縦横に農道を設けた」ことで、「大型トラクターが使える素地を作った功績は大きい」という。明治後半から農道が新設されるなど「小日本」の姿が変貌していったことがわかる。

もう一つの棚田物語

一方、菊川盆地で耕地整理が進んだ明治後半以降、町内山間部の奥地で精巧な石積み棚田が新たに誕生している。

杢路子の一つ東側の谷、歌野川の上流にある歌野大野原地区の棚田だ。ここは「明治の終わりか大正初期にかけて四国から招いた石工によって築造された」と言い伝えられている。

「歌野大野原地区の棚田」は、教育委員会の調査によると、大小十数段あり、とくに下四段の田んぼは大きく、一番大きい最下段は一一五m×二〇mあり、石垣の高さは優に三mを越すという。石積み技術は高い。とくに、石垣に施された足場は見事だ。高く垂直に近い石垣の法面ゆえ、中ほどに長い石を組み込み突き出させ、石垣法面を歩けるよう横一列に足場が並ぶ。

さらに、石積みの暗渠もいくつか見ることができた。少しでも広い良田を造ろうと築かれたものばかりだ。

高い技術を誇る石積み棚田だが、耕作放棄されて長い時間が経っているようだった。棚田の中をはじめ、周辺にはシカの糞がびっしり落ちている。

ここ、歌野川上流地区は、歌野ダム建設（一九八〇年竣工）に合わせ人々が離村したところだ。現在、地区に唯一残っていたかやぶきの古民家が再生され、地元NPOによって体験やそば料理の交流拠点として保存活用されている（「歌野清流庵（登録有形文化財）」）。

石積み棚田は、この古民家からさらに上流、人っ子一人いない山の奥へまさに水源をたどるように山道を登った先にある。ここを知る者は地元でも多くはいない。だが、田の中の低木を伐採した跡もあり、農道の草も刈られ、歩くことが可能だった。見事な石積みが今なお圧倒的な存在感を誇っているからだろうか。人の手がかろうじてまだ入っている気配があった。

馬の背のような地形を持つ日本だからこそ、半径数kmほどの小さなエリアに、急峻な山地と平坦地の物語が共存する。そんな日本の地形の特徴が生んだ民話、「小日本」を通し、日本人が脈々と受け継ぐ豊穣なる土地への憧憬と願いを垣間見たような気がした。

堅牢な石積みが残る「歌野大野原の棚田」。地主は1戸のみとか。かつてボランティアで草刈りなどを行った経緯もあるが、行政の協力がなく続かないのだと聞いた。その少し下流にある「歌野清流庵」は、NPO「歌野の自然とふれあう会」が 築約140年の古民家を山口大学とともに3年かけて修復し交流拠点として活用

菊川盆地。菊川平野、小日本平野ともいう。標高15mほど。貴飯峠からの眺めは見つけられなかったが、菊川盆地の中心部にある多武の峰（とうのみね）公園から俯瞰できた

地元の農産物直売所「小日本ふるさと市」。人々が地場産の野菜などを求め賑わう。夕方、店に入るとほとんど売り切れだった

〈注〉
＊『小日本昔ばなし』（平成五年菊川町教育委員会発行）内「小日本」、『菊川町史』（昭和四十五年発行）内「民話　杢路子噺」等をもとに作成